

「マダム・メトロ」から若い人たちへ —インド地下鉄建設現場監督からのメッセージ—

インドの地下鉄工事の現場で「マダム・メトロ」と呼ばれる女性がいる。オリエンタルコンサルタンツグローバル インド現地法人の阿部玲子取締役社長だ。圧倒的に男性優位の土木業界で、現場監督として400人を束ねる。阿部さんはなぜ海外を活躍の場を選び、どのようにキャリアを築いてきたのか。昨年5月に開催した国際会議「ジェンダーサミット10」にご登壇いただいた阿部さんに、濱口道成理事長が理系キャリアデザインのヒントを聞いた。



濱口 道成

科学技術振興機構
理事長

巻頭 対談

阿部 玲子

オリエンタルコンサルタンツグローバル
インド現地法人 取締役社長

1989年 神戸大学大学院工学研究科修士課程修了。同年 鴻池組に入社。95年 ノルウェー工科大学(現・ノルウェー科学技術大学)大学院に留学。台湾高速鉄道(台湾新幹線)トンネル工事を担当後、2004年にバンフィックコンサルタンツインターナショナルに入社。07年からインドに駐在し、首都ニューデリーなどの地下鉄建設工事に従事。会社の事業譲渡に伴い、08年からオリエンタルコンサルタンツグローバルに所属。14年 山口大学大学院で博士号を取得。博士(工学)。

逆境を力に変える

濱口 阿部さんの人生を振り返ると、女性の少ない土木分野に飛び込んだり、海外に飛び出したりと勇気が必要だったと思います。その源は何でしょう。

阿部 就職活動の悔しさが原点です。学生時代は男女の扱いに違いを感じていませんでしたが、就職活動の時に衝撃を受けました。同期の男子学生は次々と建設会社への就職が決まる中、私は入社試験さえ受けさせてもらえない。とても悔しくて、絶対に建設会社に入ると決意しました。父にも猛反対されましたが、逆に闘志が湧いてきました。

濱口 在学中は、男女の差をあまり感じなかったということですね。土木工



学は女性が少ない分野だと思うのですが、そもそも、なぜ土木の道を選んだのですか。

阿部 大学に入る前からもの作りに興味がありました。そこで工学系で得意な数学と物理だけで受験できる土木学科に入学しました。トンネルをテーマに選んだのは、その研究室だけが私を引き受けてくれたからです。女子学生は就職が難しいので、他の先生方は及び腰でした。トンネル工学の先生に受け入れてもらったのは、巡り合わせだったと思います。

濱口 就職後にノルウェーの大学に留学されたきっかけを教えてください。

阿部 日本のトンネル工事の現場には、女性が入ると山の神様が嫉妬して事故が起きるといふ迷信があり、私は現場を経験できずにいました。そんな中、いわゆるバブルが崩壊し経済が冷え込み、直属の上司から「現場経験がないから、このままではリストラされるぞ」と言われたのです。厳しい言葉でしたが、「英語が苦手な人が多いから、英語ができるエンジニアになれ」というアドバイスもくれました。

濱口 その言葉がきっかけとなった。でも、英語は苦手だったのですよね。

阿部 大の苦手でした。入試に英語がないので土木を選んだくらいですから。留学に向けた社内試験では筆記試験の点数が悪すぎて、人事から面接を受けるなどと言われたほどです。何とか食い下がり、会社に損はさせないと社長を説得しました。帰国直後には早速、会議も書類も全て英語という台湾高速鉄道の工事を担当しました。英語を身につけなさいという上司の一言のおかげです。振り返ると、節目、節目で先生や上司など重要な誰かに出会っていますね。

濱口 巡り合わせやタイミングもあったでしょうが、ご自身の判断も大きかったのではないですか。

阿部 相談する相手を間違えなかったということはあります。

濱口 良い相談相手を選びなさい、ということですね。ただ、相談相手も阿部さんが本気だったからこそ、何とかしようとしてくれたのでしょうか。

自分のスキルを点数化

濱口 日本の女性が研究者やエンジニアとしてチャンスを得るためのアドバイスはありますか。

阿部 日本では大学卒業後すぐに大



学院に進学する人が多いですが、海外では違います。就職して経験を積んでから修士号や博士号を取得するといった具合に、勉強と仕事を交互にします。仕事で必要なこと、役立つことを見極めて学ぶので効率的です。また、日本ではずっと同じテーマで研究を続ける人が多いですが、コンサルティングのような仕事ではいろいろな勉強、経験をしていた方が有利です。自分に合ったもの、社会のニーズに合ったものを見つけることが大事です。

濱口 確かに企業としては「これしかやりません」ではなく、「何でもやります」と言ってほしい。幅広く勉強しなさいということですね。他にはどうですか。

阿部 「固執するな」と言いたいです。これまでやってきたこと、やりたいことだけにこだわるのではなく、ニーズは何かを見つけることが大事です。何年か先を見越して、これから伸びそうなところを目指す。自分を高めて、しっかりと売り込んでいく姿勢も必要です。海外の人は自分を商品と捉えて、積極的に自分を売り込みます。日本人は受け身になってしまいがちですね。良いものを持っているのだから、もっと売り込めば良いのと思います。

濱口 自信を持って売り込めるキャリアを築くためのコツはありますか。

阿部 私がいる業界では採用は経歴でほぼ決まります。ですから経歴を作り込むことです。構造設計はできるけれど空調については知りませんでは仕事になりません。深い専門性よりもオールラウンダーであることが求められます。自分が最終的に何をを目指すのか、



ある程度の年齢で見極め、そのためにどのような経験が有利に働くかを考える。自分が今何点で、何を経験すれば点数を追加できるのかという考え方も、キャリアを築くのに役立つと思います。

濱口 スキルを点数化すると、キャリアをデザインしやすいということですね。

阿部 今の自分は何点かを客観的に捉え、5年後、10年後の目標にはあと何点必要かを考えれば、今、何をすべきかが明確になります。悩んでいても何も変わりませんが、何かしら経験を積みば点数は加算されます。悩む暇があるなら、とにかく動いてみるべきです。

濱口 そうしたら道は開ける。これは「阿部モデル」ともいえるすごく良いメッセージですね。

阿部 私は最短ルートでプロジェクトマネージャーになりました。女性であることが不利になる業界でしたから、強みを持つと博士号を取得しましたし、やれと言われるままに品質管理、安全、トンネルといった仕事に携わりました。やらなくては次がないという思いで挑戦した結果、点数が効率良く積み上がったのです。運もありますが、「NO」と言わなかったからだだと思います。特に女性には、どこにチャンスがあるのか、常にアンテナを張ってほしいですね。

濱口 そしてチャンスが来たらつかめ、ということですね。

阿部 そうです。その経験が自分にとってプラスになるなら、迷わず手を伸ばしてほしい。

1つプラスして次世代に渡す

濱口 インドで刺激的な毎日を過ごされているので、日本は少し退屈に感じるのではないのでしょうか。

阿部 どうでしょうか。本来はあまりアクティブな方ではないんです。休日は



テレビや電話など音が出るものを全て切って過ごします。にぎやかな現場で働いている反動かもしれませんね。コーヒーを飲み、本を読んで、静けさを楽しんでいます。プチ引きこもりが大好きなんです。

濱口 そうやってバランスを取ることが、大事なかもしれませんね。将来、日本に帰ってくることも考えていますか。

阿部 仕事が一段落したら、日本で教える側に回りたいと思っています。土木は世界最古の職業であり、また、経験工学といわれています。自分が受け取ったものに1つプラスして次の世代に渡す。これを続けていくことが大事だと先輩から教わりました。ただ、通常はプロジェクトごとに人を集めチームを組むので、終了後には解散し、ばらばらになります。技術を次に伝える必要があるのに、上手く伝えられていないという危機感があります。

濱口 技術を伝えるためにはどのような方法がありますか。

阿部 今は若手と一緒に行動して経験や情報を共有しています。現場の管理技術などは言葉で伝えられないことも多いので、経験して学んでほしい。ただこの方法では伝えられる人数がかなり限られてしまいます。将来は、より多くの若い世代に自分の経験を伝え、世界で勝負できるエンジニアを育てたいです。

* 阿部さんのインドでの経験は、今年3月29日に開催されたJSTダイバーシティセミナーでご講演いただきました。下記のウェブサイトから、レポートをご覧いただけます。
<http://www.jst.go.jp/diversity/activity/report/report16.html>

撮影：藤田修平氏(2p下、3p)